

ヘブライ語ラツォーンの概念史

——死海文書における用例を手がかりとして——

勝村弘也

1. はじめに

数年前のことと記憶するが、京都大学の水垣渉先生（現在は名誉教授）は、ある研究会の席上でギリシャ教父においてはエウドキア（εὐδοκία）の概念が神学的にきわめて重要な意義を有していたこと、しかしその後のキリスト教思想においてはその意義が見失われてしまったことを指摘された。さらにギリシャ語のエウドキアは、ヘブライ語のラツォーン（רוצון）やマーツァー・ヘーン（מצאח）にほぼ対応すること、そしてこのような一見 primitive に見える宗教的観念——そこでは、意志と感情が一体になっている——こそが思想的に重要であることを示唆された⁽¹⁾。この時以来、私はこの翻訳困難な語ラツォーンへの関心を持続してきた。

『キリスト教論藻』第35号においては、主として箴言におけるこの語の用法を検討したが、そこでは同時に旧約全体にわたる先行の語義研究の問題点にも触れた⁽²⁾。本論考は、2006年10月20日に北星学園大学で開催された日本旧約学会総会での研究発表⁽³⁾に若干の加筆および訂正を行ったものである。死海文書におけるこの語の主要な用法を調査して、旧約での用法との比較を試みるものであるが、真の狙いは、この語に表現されているような宗教的観念がユダヤ・キリスト教思想のなかでたどった歴史を解明することに他ならない。したがって、本論考では重要な用例について簡単に触れるだけであるが、新約におけるエウドキアの用法も最初から考察の範囲に入っている。今回、死海文書に注目したのは、その用例がきわめて多い上に、まさにイエスやパウロが生きて活動していた時代の文献資料を含むからである。なお、最

近、ラツォーンに対応するギリシャ語のエウドキアの用法に関して、武藤慎一による論文が発表された⁽⁴⁾。この論文は、ギリシャ教父のクリュストモスにおける用法について論じたものであるから、拙論が考察の対象としている聖書時代よりもかなり遅い。しかし、武藤論文から明らかになるのは、ギリシャ教父時代にはエウドキアの背後にあるセム的な宗教的観念が、確かに生き生きと活動していたという事実である。この意味では、武藤論文は拙論と相互に補完する関係にある。

2. アンスローポイス・エウドキアスの諸解釈

ラツォーンは、動詞のラーツァー (הצא√r-ṣ-h) から派生した名詞であって⁽⁵⁾、「好意」「お気に入り」「好み」「寵愛」「意思」「恵み」等と様々に訳される。死海文書が成立した紀元前後の時代には、この語は、その用例の多さから見ても、パレスチナのユダヤ教において神学的術語となっていたと考えられる。これが新約のギリシャ語エウドキアの用法に反映していると推定される。ここでこのギリシャ語の語用史について若干触れておく。「まず特筆しなければならないのは、この語が用いられるのがユダヤ・キリスト教関係の著作にほぼ限定されることである。これは七十人訳による動詞エウドケインからの新造語なのである。次に、この語は人間についても使用されるが、第一義的には神について使用されることである」(武藤慎一)⁽⁶⁾。つまり、七十人訳が成立した時代のギリシャ語には、ヘブライ語のラツォーンに相当する語が存在しなかったために、翻訳者がこの語の重要性から判断して新しい術語を作り出すほかなかったということになる。従って、エウドキアは一般的なギリシャ語ではなくて、もともと聖書的術語なのである。なお、動詞のエウドケインは、やはりヘレニズム時代になってから登場する語とされるが、特に聖書的な術語というわけではない⁽⁷⁾。

現代ドイツの新約学を代表する K・ベルガーは、その著『死海写本とイエス』の中で、ルカによる福音書 2 章 14 節の天使のことば「いと高きところでは神に栄光あれ」に続くカイ・エピ・ゲース・エイレーネー・エン・アン

スローポイス・エウドキアス (καὶ ἐπι γῆς εἰρηνῆ ἐν ἀνθρώποις εὐδοκίας) の解釈に関する有名な論争に言及している⁽⁸⁾。この箇所を巡っては教派間に対立が生じたほどなのであるが、その原因は独特の表現エン・アンスローポイス・エウドキアスにある。まず「人々」(アンスローポイス) と問題の語エウドキアスの接続関係がセム的 (つまり旧約のヘブライ語の表現を下地にしたもの) であるためにギリシャ語としては不自然な表現になり、その結果テキストに異読が生じたことがある。次にエウドキアの語義に関しても解釈が分かれる。ベルガーは、この箇所の主要な解釈を以下の3種類に分類する。

- (1) 「地の上には、善意の人々に平和があるように」
- (2) 「地の上には平和が、人々には満足 (Wohlgefallen) があるように」
- (3) 「地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」

この3種類の解釈に対してベルガーが付した簡単なコメントに若干の補足説明を加えながら問題点を明らかにすると次のようになる。まず(1)の読み方は、ウルガタ訳の *et in terra pax in hominibus bonae voluntatis* を代表例として挙げることができる。これはカトリック的な人間理解、つまり人間の善意は神によって報われるのだとの考え方に照応している。(2)は、宗教改革者マルティン・ルターの解釈を代表例とするが、彼が手にしていた本文はエラスムスの校訂版であって、問題の箇所は「エウドキアス (εὐδοκίας)」(属格) ではなくて「エウドキア (εὐδοκία)」(主格) である。つまり天使のことばを「天・地・人々」に3分割して読むのであって、英語欽定訳の *Glory to God in the highest, and on earth peace, good will toward men* もこのような読み方に従っている⁽⁹⁾。現代の正文批判の立場からは退けられる解釈であるが、Wohlgefallen (このドイツ語も翻訳困難な語であるが、一応「満足」と訳す) あるいは「善意 (good will)」が神から人間に向けられるものであると解釈されていることが注目される。神の主権の強調は、宗教改革の理念に合致するのである。なお、ルター訳のドイツ語 Wohlgefallen は、問題の語の意志的な側面よりも感情的な側面を強調している点で聖書的な観念をうまく表現している。(3)は口語訳や新共同訳なども採用している現代の読み方で

あるが、改革派の「神が〈欲し〉選びたもうが故に、み心にかなう、そういう人々に平和があるように」の意味だとする解釈が代表的である。つまり、神の選びは人間の功績とは無関係であると考えて、ここで語られているのは人間に対する神の意志であると主張する。

ベルガーによると「それゆえ根本的な問題は、ここで語られているのは、人間に対する神の意志なのか、それとも人間の、むくわるべき、善き意志なのか、ということである」。彼はこのような論争は、死海文書の「感謝の詩篇」や「共同体規則」のラツォーンの用法から判断して、神の選びの意志が重要であるという仕方で決着がついたと言う。「もちろん、人は神の判断に従い、神のみ心にかなうよう行動することもできるが、いずれにせよ、神の意志が基準なのである」と言うのである⁽⁹⁾。このようなベルガーの結論は、基本的には正しいとしても、いささか問題を単純に捉え過ぎている。すでに指摘したようにラツォーンは、意志と感情が未分化なまま結合している語であるばかりではない。旧約における用法を調べると、神から人への方向と、人から神への方向という〈双方向的性格〉が確認されるからである⁽¹⁰⁾。このような語の性格が、クムラン文書においても確認されるならば、新約時代のユダヤ教徒が、単純に改革派流のものの考え方をしていたかのように主張するのは誤っていることになる。

結論を先取りすると、以下のようになる。死海文書におけるラツォーンの用法から明らかになるのは、まず、この語の双方向的性格が維持されていることである。次に、神による義人の救済が予定されているとの確信は、人間の良い行為が神によって受け入れられることと何の矛盾も生じないことである。この点から言うと、ルカによる福音書2章14節のカトリック的な理解を誤っているとすることは出来ない。

3. 旧約におけるラツォーンの用法

旧約におけるラツォーンの従来訳語を日本語訳の各種の聖書で調べてみると、場当たりの訳した結果であろうか、訳語にほとんど統一性が見られ

ない。これは例えば、ドイツ語のルター訳が *Wohlgefallen* を好んで用いているような事情とは大きく異なっている。これは、間接的に我国の聖書翻訳者がこの語の思想的な重要性を自覚してこなかったことを物語っているように思われる。

先にも触れたように、旧約におけるこの語の用法については、動詞ラツォーの語義を含めてすでに論じたことがあるので、ここでは要点だけを述べる。まず KBL 第3版では、この動詞を I $\sqrt{r-s-h}$ と II $\sqrt{r-s-h}$ の2種類に分けているが⁽¹²⁾、この分類には根拠が薄い。Gerleman は、この語の基本的な意味を *annehmen* 「引き受ける」「受け取る」であると推定する。元来、相続地や略奪物の分け前を受け取るような場合に使われたのであろう⁽¹³⁾。このようにたいていの場合は、〈何かを満足して受け取る〉〈喜んで受け取る〉のような肯定的な意味になるが、稀に〈罪責を引き受ける〉のような場合——KBL 第3版によると II $\sqrt{r-s-h}$ (レビ記26章34節、41節、43節参照⁽¹⁴⁾) ——があるのだと考えれば、この動詞は1種類しか存在しない。

名詞ラツォーの用例は、旧約で合計56回あるが、捕囚期以降のテキストに偏っている。確実に王国時代とされるのは、箴言の古い伝承層の場合などでかなり少ない⁽¹⁵⁾。元来の生活の座としては、祭儀と宮廷が想定される。これが次第に、神がラツォーの主体となる神学的概念へと発展していったのであろう。このような経緯は、箴言の「ソロモンの第一詞集」での古い用法から、第2イザヤや詩篇中の比較的新しいと推定される用法へと辿ることによって、ある程度推定することができる⁽¹⁶⁾。

詩篇とイザヤ書には、ラツォーが他の名詞と結合して複合観念を形成している用法がある (*status constructus* をとる他の名詞につながる用法)。このような用法は、死海文書にも出てくるし、ルカによる福音書2章14節のエウドキアの用法を解釈するときの鍵にもなる。先の拙論の記述と重複するが、説明の都合上、これらの用例についてもう一度述べておく⁽¹⁷⁾。問題の用法は、詩篇69篇14節、イザヤ書49章8節、58章5節、60章7節、60章10節、61章2節の6箇所にある。ただし、60章7節には正文批判の立場からみて問題があるので考察から除外する。そこでこれら5例についてラツォーを訳さない

ままで逐語訳を付け、新共同訳といくつかの英語とドイツ語の訳文を適宜参照して整理すると以下のようなになる。なお、新は新共同訳、L.はルター訳、Z.はチューリヒャー聖書、RSVはRevised Standard Version、NKJVはNew Kings James Versionである。WBCは、J.D.W.Wattsのイザヤ書注解(Word Biblical Commentary)⁽¹⁹⁾をさす。

詩篇69・14 עת רצון 「ラツォーンの時」

御旨にかなうときに(新) ; zur Zeit der Gnade (L.) ; zur Zeit, da es dir wohlgefällt (Z.) ; at an acceptable time (RSV) ; in the acceptable time (NKJV)

イザヤ49・8 בעת רצון עניתך 「ラツォーンの時には私はあなたに答えた」

わたしは恵みの時にあなたに答え(新) ; Ich habe dich erhört zur Zeit der Gnade (L.) ; In a time of favour I have answered you (RSV) ; In an acceptable time I have heard You (NKJV)

イザヤ58・5 ויום רצון ליהוה 「ヤハウエにとってのラツォーンの日」

主に喜ばれる日(新) ; einen Tag, an dem der Herr wohlgefallen hat (L.) ; und ein Tag, der dem Herrn gefällt (Z.) ; an acceptable day to the Lord (NKJV) ; a day acceptable to Yahweh (WBC)

イザヤ61・2 שנת רצון ליהוה 「ヤハウエにとってのラツォーンの日」

主が恵みをお与えになる年(新) ; ein gnädiges Jahr des Herrn (L.) ;

the acceptable year of the Lord (NKJV) ; the year of Yahwe's favor (WBC)

イザヤ60・10 וברצוני רחמתיך 「私のラツォーンにおいて私はあなたを慈しむ」

今、あなたを憐れむことを喜ぶ(新) ; aber in meiner Gnade erbarme ich über dich (L.) ; but in my favour I have had mercy on you (NKJV)

それぞれの翻訳聖書に必ずしも整合性があるわけではないが、ルター訳とNKJVにはかなり明瞭に傾向が認められる。ルター訳は、神の主権を強調して、このようなラツォーンをGnade(恵み)として把握する⁽¹⁹⁾。他方、NKJVは形容詞acceptableを多用し、人間の捧げるものが神に受け入れられることとして把握する⁽²⁰⁾。どちらの解釈も成立するのがこのようなラツォーンの基

本的な性格なのである。

ラツォーンは特に祭儀においては（レビ記の用例参照）神と人との交わり
の場に出現する喜びとしての性格を持ち、双方向的である。箴言では、神のラ
ツォーンは人間の倫理的行為との関連で語られ、人間の善い行いが神に受け
入れられることを意味している（箴言11・1、11・20、12・2、12・22、15・
8）。神から人への方向を強調すれば、「恵み」となるが、人から神への方向
を強調すれば「受け入れられる (acceptable)」という訳語が当てられること
になる。いずれにせよラツォーンの双方向的な性格は、他の名詞と結合して複
合観念を形成している上記の5例においても確認されるのである。

4. 死海文書におけるラツォーンの用法

死海文書における用例は、Martin G. Abegg の Concordance によると聖書以
外の文書で少なくとも138回もあって⁽²¹⁾（但し、同一の箇所が重複して数え
られている場合がある⁽²²⁾）、当時のパレスティナにおけるこの語の重要性を
示している。ここではこれらすべての用例について検討することは出来な
かったが、「ダマスコ文書」「感謝の詩篇（ホダヨート）」「共同体規則」などの
重要な文献については精査したので、おおよその傾向は把握できる⁽²³⁾。なお、
説明の関係上それぞれの用例には番号を付け、ラツォーンの訳語にはくく
をつけた。なお、ラツォーンを意図的に翻訳しなかった場合があるが、これ
らについてはその意味を後で説明する。[・・・] は、写本には存在しない
が、推読によって補った箇所を示し、訳文の（・・・）は翻訳の都合上意味
を補った箇所を示す。

(1)ダマスコ文書 (CD)

(1)―1 第2欄21行目 ויהיו כלא היו בעשותם את רצונם

彼らが自分の〈欲すること〉を行ったために、彼らは存在しなかった者の
ようになった

(1)―2 第3欄3行目 ולא בחר ברצון רוחו

彼らの霊が〈欲すること〉を選ばなかった

(1)―3 第3欄11行目 **בעזבם את ברית אל ויבחרו ברצונם**

彼らが神の契約を棄てて、彼らの〈欲すること〉を選んだ

(1)―4 第3欄12行目 **לעשות איש את רצונו**

各人が、自分の〈欲すること〉を行うこと

(1)―5 第3欄15行目 **וחפצי רצונו אשר יעשה האדם וחיה בהם**

人が行うならば、それらによって生きるであろう彼の〈意志〉の要求

(1)―6 第11欄4行目 **אל יתערב איש מרצונו בשבת**

各人は〈自分勝手〉に安息日と係わっては(?)ならない

(1)―7 第11欄21行目 **ותפלת צדקם כמנחת רצון**

義人たちの祈りは、ラツォーンの供え物のようだ

ダマスコ文書では以上7つの用例が確認できる。ここでは人間がラツォーンの主体になっている用法が目立つ。このような場合には、「勝手気まま」の意味になっている(エステル記1・8、9・5、ダニエル書8・4、11・3等を参照)。(1)―6の動詞 *jt'rb* の意味に関しては、色々な解釈が提案されており、「安息日に定められた境界を越えるな」の意味に解釈する者もいる⁽²⁴⁾。(1)―7のラツォーンは、レビ記19章5節、22章19節以下のような祭儀的用法にならって「神に喜んで受け入れられる(犠牲)」の意味で使われている。なお、この文章は、箴言15章8節後半ときわめて似ている。

(2)共同体規則 (1QS)

(2)―1 第5欄1行 **ולהחזיק בכל אשר צוה לרצונו**

彼の〈意志〉にそって命じられたすべてのことを固く守るために

(2)―2 第5欄9行 **הכוהנים שומרי הברית ודורשי רצונו**

ツァドクの子ら(すなわち)契約を守り、彼の〈好意〉を求める祭司たち

(2)―3 第5欄10行目 **המתנדבים יחד לאמתו ולהתלך ברצונו**

彼の真実と彼の〈意志〉に従う歩みとのために共に献身する人々

(2)―4 第8欄6行目 **וביחרי רצון**

〈御意志〉に違って選ばれた者たち

(2)―5 第8欄10行目 וְהָיוּ לְרִצּוֹן לְכַפֵּר בְּעַד הָאָרֶץ

彼らは〈お気に入り〉となって、地のためにあがないをなす

(2)―6 第9欄4行目 וְלְרִצּוֹן לְאָרֶץ מִבֶּשֶׁר עוֹלוֹת וּמַחֲלָבֵי זֶבַח

(彼らは) 燔祭の肉や犠牲の脂肪よりも、地のためのラツォーンとなる

(2)―7 第9欄5行目 וְתַמִּים דֶּרֶךְ כְּנֻדַּת רִצּוֹן

道の完全さは、自発的なラツォーンの供え物

(2)―8 第9欄13行目 לַעֲשׂוֹת אֶת רִצּוֹן אֱלֹהִים

神の〈喜ばれること〉を行うこと

(2)―9 第9欄15行目 לְהַחֲזֹק עַל פִּי רִצּוֹנוֹ כְּאִשֶּׁר צִוָּה

彼が命じられたように、彼の〈意志〉に適うように決意を固めること

(2)―10 第9欄23行目 לַעֲשׂוֹת רִצּוֹן בְּכֹל מַשְׁלַח כַּפַּיִם

手で掴まえるすべての事において、(神の)〈喜ぶこと〉を行うこと

(2)―11 第9欄24行目 חֹזֶלֶת רִצּוֹן אֱלֹהִים לֹא יִחַפֵּץ

神のラツォーンなしには、彼は楽しまない(?)

(2)―12 第11欄17行目 וְבָלוּ רִצּוֹנֶיךָ לֹא יַעֲשֶׂה כֹּל

あなたの〈意志〉なしには、何事も行われません

(2)―13 第11欄18行目 וְכֹל הַנְּהִיָּה בְּרִצּוֹנֶיךָ הִיא

起こるべき全てのことは、あなたの〈意志〉によって起こりました

共同体規則の以上13の用例では、ラツォーンの主体が神である場合が圧倒的に多い。このような用例では、たいてい「意志」と訳したが、そのような場合でも「好意」のような感情的な側面は当然含まれている。(2)―6と7は、祭儀的用法を下地にしており「神に喜んで受け入れられる(もの)」の意味である。(2)―11の用法は、あいまいな表現であるが、「意志」と訳されることが多い。しかし文脈から判断して「喜ぶこと」の意味にもとれる^例。

(3)感謝の詩篇 (1QH^a)

(3)―1 第4欄23行目 וּמִכְשׁוֹל בְּכֹל דְּבָרֵי רִצּוֹנְךָ

すべてのあなたの〈好意ある〉ことばに躓くことから

(3)―2 第6欄10行目 ולברך [ב] צדק כול בוחר רצונך

あなたの〈意志〉を選びとる者たちを、みな、義 [をもって] 祝福するため

(3)―3 第6欄13行目 [ברצונכה בא] דם

ひ [と] に対するあなたの〈好意〉によって

(3)―4 第7欄18行目 למועד רצון

定められた〈恵み〉の時のために⁽²⁶⁾

(3)―5 第8欄13行目 ואדעה כי ברצון[נכה] באיש הרביתה

私は知っています、[あなたの]〈好意〉によって、ひとに・・・を増やす

(3)―6 第8欄18行目 [ואני בחרתי להבר כפי כרצון[נך]

私は [あなたの]〈好意〉に応じて私の掌を浄化することを選びました

(3)―7 第8欄20行目 ולהגישני ברצונך כגדול חסדיך

あなたの慈愛の偉大さにふさわしく、あなたの〈好意〉の中に私を近づかせるためです⁽²⁷⁾

(3)―8 第8欄21行目 מעמד רצ[ונך] אשר בח[ר]תה

あなたが選んで下さった [あなたの〈お] 気に入りに] の地位

(3)―9 第9欄8行目 ולא ידע בלוא רצונכה

あなたの〈意志〉なしには知られません

(3)―10 第9欄10行目 כול [אשר במ]ת] כנתה לרצונכה

あなたの〈意志〉にしたがって、[その中にある] 全てのものを案 [配] した

(3)―11 第9欄15行目 וכול אשר במ תכנתה לרצונכ]ה

あなたの〈意志〉にしたがって、その中にある全てのものを案配した

(3)―12 第9欄20行目 ועל פי רצונכה יהיה כול

すべてのことは、[あなたの〈意] 志] にしたがって [起] こります

(3)―13 第12欄33行目 ורוב רחמיו על כול בני רצונו

すべての彼の〈意志〉にかなう子らに対する大いなる慈しみとを

(3)―14 第13欄4行目 על פי רצונכה

あなたの〈意志〉にしたがって、

(3)—15 第18欄 2行目 **ובלוא רצונכה לא יהיה**

あなたの〈意志〉なしには、(何事も) 起こりません

(3)—16 第18欄 6行目 **ומה אתחשב באין רצונכה**

あなたの〈意志〉なしには、何を私は企てられましょう

(3)—17 第18欄 9行目 **ולא ידע בלוא רצונכה**

あなたの〈意志〉なしには、(何事も) 知られません

(3)—18 第18欄22行目 **אתה יצרתה ר[וח עבדכה וכרצ]ונכה הכינותני**

あなたは、[あなたの僕の] 霊を形成し、あなたの〈意 [志] に従って] 私を決定した

(3)—19 第19欄 9行目 **ורחמיכה לכול בני רצונכה**

あなたの慈愛が、すべてのあなたの〈意志〉にかなう子らに

(3)—20 第24欄12行目 **עד קץ רצונכה**

あなたの〈恵み〉の時に至るまで

感謝の詩篇の場合には、神の主権と意志が強調される用例が多い。第9欄の4回の用例は、いずれも神の世界統治の意志に関係している。(3)—15、17も同様の思想を表現している。また、(3)—4、20の「恵みの時」のような複合名詞になる用例も認められる(先に考察した第2・3イザヤの用法と類似)。(3)—13は、ルカによる福音書2章14節の用法に類似している。

(4)知恵文書 (4Q416—418)

(4)—1 4Q416第2断片第2欄7行目⁽²⁰⁾

אם איש לא יטכה ברצון שחר פניו וכלשונו דבר

[もしも、或るひ] とが、〈好意〉をもってあなたに傾かないならば、彼の顔を伺い、彼のことばに従って語りなさい (?)

(4)—2 4Q416第2断片第3欄12行目⁽²⁰⁾ **רצונו שחר תמיד**

絶えず彼の〈意志〉を求めなさい

(4)—3 4Q418第81断片10行目 **ובידכה להשיב אף מאנשי רצון**

ラツォーンの人々からの怒りを転じるのは、あなたの手によるのです

(4)―4 4Q418第126断片 8行目 יִסְתַּר כּוֹל וְגַם לֹא נִהְיָ בְּלֹא רְצוֹנוֹ

すべての事は隠されており、またそれらは彼の (=神の) 〈意志〉なしには起こらない

あまり保存状態が良いとは言えない知恵文書からは、4例のみを選んだ。

(4)―1は本文の保存状態が十分ではないために、他の解釈も可能であるがマルチネスの提案に従って読んだ⁽⁶⁾。(4)―3の「ラツォーンの人々」は、ルカによる福音書2章14節のアンスローポイス・エウドキアスに相当する表現であるが、残念ながら文脈がよく分からないので意味は判然としない。(4)―4は、クムランの知恵文書の特徴をよく示す表現である。

以上、死海文書におけるラツォーンの相当数の用法について考察した。神の主権と意志を強調する神学的術語としての用法がたしかに優勢ではあるが、「好き勝手」のような旧約にみられる他の各種の用法もかなり認められる。基本的には、旧約での用法を下地にしていることが確認されるのである⁽⁷⁾。

注

- (1) 西欧の伝統的な思考法では、どうしても「意志」と「感情」は別に扱われることになり、その場合たいていは、神の「意志」だけが問題になる。セム的な現実の分節の仕方と西欧的な分節の仕方が異なるために起こる同様の問題は、他の聖書的用語、例えば、神の「義」や神への「畏れ」のような場合にも見られる。
- (2) 「箴言における積義上の問題(4)」『キリスト教論藻』第35号(2004年)1～15頁。G. Schrenk, Art. $\varepsilon \dot{\upsilon} \delta \omicron \kappa \varepsilon \omega$, Theologisches Wörterbuch zum NT II, Stuttgart (1935) 736ff.; G. Gerleman, Art. rsh Gefallen haben, in: Jenni/ Westermann, Theologisches Handwörterbuch zum AT, Bd. II, München und Zürich (1976) 810ff. を批判的に検討した。
- (3) 「ヘブライ語ラツォーン概念史——旧約から新約時代まで——」
- (4) 武藤慎一著「クリュソストモスのエウドキア(神の喜び)理解」『基督教学研究』第25号(2005年)129-152頁。
- (5) G. Gerleman, a.a.O., 810.
- (6) 武藤慎一=注(4)132頁。G. Schrenk, a.a.O., 740.
- (7) G. Schrenk, a.a.O., 736. 動詞エウドケインとラーツァーが、1対1に対応している訳で

- はない。例えば、ヘブライ語ハーベツもエウドケインと訳される。また、ラーツァーとハーベツは、ギリシャ語のエウドケイン以外の動詞にも訳される。
- (8) K・ベルガー著、土岐健治監訳『死海文書とイエス』教文館（2000）145-147頁。
- (9) ヘンデルの「メサイヤ」の歌詞などを通して、流布している読み方であり、そのために The New King James Version もこれを踏襲する。詳細に述べるとルネサンス時代には、前置詞のエンがない写本や、エンのかわりにカイ（そして）となっている写本が流布していた。ギリシャ語としてはこのような表現の方が自然であって、意味が取りやすい。
- (10) ベルガー＝注(8) 146頁より引用。
- (11) 拙論＝注(2) 12頁。
- (12) Koehler/Baumgartner, *Hebräisches und Aramäisches Levikon zum AT, Dritte Auflage, Lieferung IV*, E.J.Brill (1990) 1194f.
- (13) G. Gerleman, a.a.O., 810.
- (14) 山我哲雄訳の「レビ記」『旧約聖書 I 律法』岩波書店（2004年）によると26章34節の2つの用例を「享受する」と訳す。41節は「(罪責を) 償う」、43節の2つの用例は「享受する」と「償う」になっている。ここに一種の語呂合わせがあることは明らかであろう (G. Gerleman, a.a.O., 811.)。KBL 第3版の場合、これらの用例の意味を厳密に規定しようとして、混乱を生じている。なお、祭儀用語としてのニファル形での6つの用例を山我訳レビ記は「受け入れられる」と適切に訳している。
- (15) 詳細は、拙論＝注(2) 4頁以下参照。
- (16) 拙論＝注(2) 6頁以下参照。箴言でヤハウエがラツォーンの主体になっている用法では、トーエバー「嫌悪するもの」と対照的に用いられている場合が注目される。
- (17) 拙論＝注(2) 11頁以下。
- (18) J.D.W.Watts, *Isaih 34-66 : Word Biblical Commentary* (1987)
- (19) 同様の傾向は、M.Buber のドイツ語訳にも認められる。
- (20) このような傾向は、祈禱を重んじる聖公会の伝統と関係するのかも知れない。
- (21) Martin G. Abegg with J.E.Bowley & E.M.Cook, *The Dead Sea Scrolls Concordance, Part 2*, Brill (2003) 690f.
- (22) 例えば、4Q416 2ii 7は、4Q417 2ii+23, 10および4Q418 8, 7と同一。
- (23) Abegg の Concordance を参照しながら、Florentino Garcia Martinez and Eibert J. C. Tigchelaar, *The Dead Sea Scrolls Study Edition Vol.1-2*, Brill (1997-1998) によってヘブライ語本文を確認した。翻訳に際しては、Martinez の英訳と M. Wise/M. Abegg/E. Cook, *The Dead Sea Scrolls. A New Translation*, Harper San Francisco (1996) を参照した。さらに Johann Maier, *Die Qumran-Essener : Die Texte vom Toten Meer, Bd.I-II*, UTB1862-1863, Reinhardt (1995) をも参照。「共同体規則」と「ダマスコ文書」については、適宜以下の対訳をも参照。J.H. Charlesworth (ed.), *The Dead Sea Scrolls. Hebrew, Aramaic, and Greek Texts with English Translations, vol.1.Rule of the Community and Related Documents*

(1994); J.H. Charlesworth (ed.), *The Dead Sea Scrolls. Hebrew, Aramaic, and Greek Texts with English Translations*, vol.2. *Damascus Document War Scroll and Related Documents* (1995)

- (24) M. Wise/M. Abegg/E. Cook=注(23) 68. 他に、性行為のことを問題にしているとする解釈などがある。Johann Maier=注(23) Bd. I, 23参照。
- (25) 「楽しまない」の「ない」の綴りには問題がある。この箇所の前後では、動詞ラツァーが用いられており、神と人との交流について語られている。23行目末の(2)―10の文以下を訳すと以下のようなになる。「手で掴まえるすべての事において、また彼 (=神) が支配するすべての事において、彼が命じたように、(神の) 〈喜ぶこと〉を行うこと。(そうすれば) 彼 (=各人) によってなされたすべての事を、自発的な供え物として彼 (=神) は喜ぶであろう。そして神のラツォーンなしには、彼は楽しまない。[そして] 彼の口のことばをすべて喜んナ受け入れる。彼の命じなかったすべての事は欲求しない」。
- (26) この箇所の前後関係が分かるように、15行目以下を訳す。「また、私は知っています、あらゆる霊的に形造られたものが、[またあらゆる・・・が] あなたの手によるものであることを。あなたは、それを創造されるよりも前に決定されました。どうして誰かがあなたのことばを変えることが出来るのでしょうか。ただあなただけが、義人を[創]造されました。そして、定められた恵みの時のために、あなたの契約のうちに守られるようにと、胎(の中)からあなたは彼を決定されました」。
- (27) 以下に第8欄18―20行目を訳して前後関係を明瞭にする。「義人の霊をあなたが記録されることを私は知っていますので、私は[あなたの]好意に応じて私の掌を浄化することを選びました。そしてあなたの僕の魂は、あらゆる不義の業を忌み嫌いました。そして私は知っています、あなたの他に誰も義しくはないことを。そして私は、あなたが[私に]与えて下さった霊によって、あなたの顔を和らげます。(それは) あなたの慈[愛]を、[あなたの]僕のもとで[とこしえ]に至るまで貫徹させるため、あなたの聖なる霊によって私を浄めるため、あなたの慈愛の偉大さにふさわしく、あなたの好意の中に私を近づかせるためです」。
- (28) 4Q417第2断片第2欄+第23断片10行目、4Q418第8断片7行目と同一
- (29) 4Q418第9欄12行目と同一
- (30) Florentino Garcia Martinez and Eibert J. C. Tigchelaar=注(23) Vol.2, 850f.
- (31) 以上の考察をもとに、さらに新約におけるエウドケインとエウドキアの用法について考察する必要がある。今後の課題としたい。